

ナホトカで帰国を待っている間に、ナホトカ港の近くの丘にある日本人抑留者の墓地の掃除に行ったことがあった。シベリア各地の地獄のようなラーゲルでの生活を生き抜き、日本に海を通じてつながっているナホトカまでたどり着き、迎えに来た船に乗れば両親、妻子等の家族の待っている日本、夢にまで見た日本に帰れるのに帰国船に乗ることができず、日本に帰って行く戦友に乗せた船の汽笛を聞きながら死んでいった戦友のことを思うと、何と言って手を合わせればよいかと迷ったものであった。

五月のナホトカには雪が残っていたが、船上から見る五月の祖国日本の若葉の美しさは、日本に帰れたという喜びと重なって、言葉では現すことのできない日本国の美しさであった。

検疫と上陸手続きのため舞鶴港に停船した時、迎える船から六段の調べを奏でる琴の音が聞こえて来ると、日本に帰り着いたという喜びで沸き返っていた船の甲板が静かになり、しばらく祖国日本の懐かしい音楽に聞き惚れて、確実に帰国できたという実感がして

きた。

舞鶴で帰国手続きを終えて帰省列車に乗り込み、故郷の名古屋駅に着いたのは昭和二十三年五月十日午前四時頃だった。汽車から降りる復員者数は十人位であったが、迎えの人は多くおり、このように出迎えてもらえることの慶びを感じた。

帰りきて 出直し人生の第一歩

シベリアは 生きている限り忘れ得ず

シベリアの 怒りをこらえて生きている

シベリアの 墓参のテレビ今日もまた

一青年の軍歴と抑留記

愛知県 天野 春吉

愛知県安城市で生まれる。八歳の折、一家は父親の都合で名古屋市北区に転居した。家業は薬局であった。生活は裕福の方であったが私は家を継ぐのが嫌

で、昭和十五（一九四〇）年三月、北区の尋常高等小
学校を卒業して同年三月滿蒙開拓青少年義勇軍に応募
して採用されて、家族の反対を押し切って同年三月二
十八日茨城県内原訓練所に入所した。同所で二カ月の
基本訓練を受け、同年六月二十四日渡滿の途につい
た。

同年七月二日、旧滿州国浜江省珠河県一面波にあつ
た滿州開拓青年義勇隊一面波訓練所に入所した。ここ
では主として滿語等の学習が行われて、農事訓練は少
なく、当時はまだ治安が悪く軍事訓練の方が多い生活
であった。

昭和十六年七月になると関東軍特別大演習があり、
訓練所から五十人が動員され、残った我々は、三角山
等で行われたガス弾やロケット弾等の使用跡の消毒や
処理に多用された。

昭和十六年九月三十日、吉林省敦化县大石頭に移動
した。ここでは特に厳しい軍事訓練と徹底した軍国主
義を当時の訓練所長で熱河作戦の河原挺身隊長であつ
た河原侃閣下にたたき込まれ、農事訓練はそっちのけ

であった。

昭和十八年三江省鶴立県梧桐村北山地区に入植、十
月に檜山義勇隊開拓団として発足する。

昭和二十年七月までに団員のほとんどが関東軍に召
集され、残留組は女子六人と男子六人の十二人がいる
だけであった。

昭和二十年八月九日早朝、軍よりの引揚げ命令で開
拓団を放棄した。そのうち女子を含む未成年と兵役免
除団員六人はハルビン経由で新京（長春）に避難、一
年後に死亡者一人を除き帰国した。男子団員は軍の指
示で牡丹江に集結、防衛召集の名目で他の開拓団やそ
の他の邦人と共に部隊編成されたが（八月十日か十一
日頃）、武器らしい兵器の支給はなく、私たちは団か
ら持参した旧式のチェコ銃だけであった。この時点で
私たちの分隊は牡丹江に架かる鉄橋爆破の工兵隊に応
援せよであった。この部隊のその後の状況は全くわか
らないし、鉄橋到着後にソ連軍の侵攻が早く、戦場を
さまよって二度と出会うことはなかった。また短時間
で編成されてたった一日の出会いのため、部隊名はも

ちろんのこと、上官の名前さえ記憶していない。

終戦から何日かして、横道河子^{オホドログ}か拉古であったか明確ではないが、いずれかの山の中でソ連兵に捕まり武装解除された。その後は徒歩で十数日かけて磨刀石^{トウシ}、代馬溝^{ダイバコウ}、穆稜台^{ムリョウダイ}等の激戦地跡を連行され、綏芬河の国境からグロデコーボに入り、ここで一千人になるまで待機させられ、「ダモイ東京」の言葉に騙されてトラックに乗せられ虎林虎頭の対岸のイマンに運ばれ収容された。

二十年十二月末、病人と共に再び満州の牡丹江市に近い旧海林病院の隣に仮設された収容所に送り返され、満州に戻った。当時この収容所と病院には合わせて一万人の日本軍の将兵と病人が収容されていた。正月はここで迎えたように記憶している。ここではソ連の戦利品等を集める労役と病院の使役に従事していたが、やがて伝染病に感染し生死の境まで体験したが幸い治り、二十一年四月に入ると中国の内戦で中共軍が近くまで迫り、あわただしく千人単位に部隊編成がなされて、今回もダモイ東京と騙され汽車に押し込まれ

て再びソ連領のマンゾフカの収容所に送られた。もしまたシベリアに送られることが解っておれば、多分私は住み慣れた満州で脱走したことであろう。その後、ソ連領内のヒョードロフカなど幾カ所もの収容所を転々と移動させられ、伐採、山奥からの木材搬出、トラックや貨車への積込み、森林鉄道の施設工事、草刈り、トラクターの整備、コルホーズの作業、漬物工場の手伝い、煉瓦の運搬、煉瓦建ての建築作業、道路工事など、数え切れない程の作業を体験した。

二十二年冬までの待遇、食事等は劣悪を極めたが、やがて始まった民主運動で待遇は徐々にであるが改善され、食糧事情はよくなっていった。

二十三年に入るとどこからかダモイの話聞くようになり、作業の都合で移動する度にダモイと思いき喜んで乗車するのだが、また違う場所に降ろされてがっかりするので、この頃になるとまたそのダモイかと慣れてしまったが、日がたつに従い待遇もよくなり、作業も自主的に行われ、看視兵やナチャーニック（収容所長）もノルマさえ完了なら笑顔で応答するようになって

た。

二十三年十月に入り本当のダメイを知らされ、ナホトカに向かった。しかしこれも信用せず、日本の船に乗って初めて帰国を肌で感じた。苦難の果て、酷寒の地で不帰の客となった戦友の霊安かれと祈る。

シベリアから北朝鮮へ

愛知県 水野 四郎

大正十三（一九二四）年、名古屋市千種区鍋屋上野町の農家に生まれ育ち、名古屋市立商業学校に入学し、昭和十六（一九四一）年二月に繰上げ卒業をして翌十七年一月に、夢と希望を持って、日本の新天地と言われていた満州国の首都新京（長春）市興安大路に本社のある進和洋行に社員として就職した。当時の満州行きは国を挙げて盛大に送り出していたので、その意気に乗って、家族、親族一同の心温まる送別を受けて名古屋を後にした。勤務地新京市に着任した後、上

司、先輩たちの指導を受けて建設途上の満州国の首都新京市において製材用の鋸のこぎりの販売をする商社で働いた。

昭和二十年現地で徴兵検査を受けて、同年五月二十日、関東軍直轄機動第一旅団第三連隊通信中隊へ現役入隊して、南満州公主嶺にあった部隊に入営した。

昭和二十年七月、訓練期間中にもかかわらず突然移動を命ぜられた。この原隊には再び戻るまいと告げられて公主嶺駅まで赴くと、行き先も告げられず貨車の中へ押し込まれた。そうして第一期検閲が繰り上げられた形でやがて戦場となるソ連国境の近くへと運ばれて行った。着いた所は北朝鮮に近い凶トウゴ們的奥地に入った山間部であった。そうして作業は陣地構築と弾薬類の運搬であった。

そのうちに七月十五日頃から体調を崩して練兵休を繰り返している間に終戦となり、武装解除された。第三軍司令部のあった延吉がこの地域の日本軍の武装解除された将兵の集合地であって、同地に集まった将兵を約千人を一個大隊に編成して、徒歩で琿春を経由し